

高知県教職員退職互助会幡多支部主催

「一日研修会(土佐清水市大会)」で講話

今月14日(木)10:00より土佐清水市栄町の珉宝2階ホールにて高知県教職員退職互助会幡多支部主催の「一日研修会(土佐清水市大会)」が開催された。今回は「天災は忘れた頃に“池道之助の地震津波碑”」との演題で講話をさせていただいた。

研修会では、講話のほかに土佐清水地区の互助会女性部の有志が、地元で伝わる無形文化財「バラ抜き節」の踊りと芸能舞踊をおこなった。退職された教職員の方々とは思えない、皆さん元気溘溘であり、そのパワーに圧倒される。

講話では、令和4年度末に刊行される『新・土佐清水市史』のPRをおこない、諸先輩から多くの温かい言葉や熱いエールを送っていただいた。幡多支部・川島支部長をはじめ関係者の方々に感謝申し上げたい。

* * * * *

講話では、前半、バラ抜き節について、近世末の山城屋の隆盛、大正期の動力船導入後の遠洋漁業の実態、節加工の工程などについて丁寧に説明した。後半は、池道之助が安政二年(1855)3月に建立した池家墓所。その銘文には、宝永地震・安政南海地震の惨状と地震津波への留意点が刻まれている。加えて『今昔大變記』も記述した。

次の記事面に、池家墓所に刻まれた銘文翻刻(右側)とその通解(左側)、及び『今昔大變記』の一部抜粋を掲載しておくので参照いただきたい。



清水中浜峠池家墓碑（翻刻）

【正面】嘉永七年寅十一月五日申ノコク大地
南無阿弥陀佛

震静否浦々大潮入流家死人夥シ

【左面】前日ヨリ潮色にこり津波入並ニ井ノ水
にこる或ハ干カレル所モ有兼テ心得ベシ
是時諸人之悲歎難盡言語仍而爲
後世謹建之中濱浦池道之助清澄

【右面】寛永四年亥十月四日未ノ刻大地震静否

浦々大潮入コト三度流家死人夥シ

翌子ノ年中少々ノ地震タエス大地震の時火ヲけし
家ヲ出ルコト第一也家にしかれ焼死者多

【裏面】干時安政二年 乙卯三月建之 池先祖墓所

…（通解）…

【正面】嘉永七年十一月五日の夕方4時頃、大地震が静まるや否や浦々に津波が流
入して家屋が流出し、死者がおびただしく発生した。南無阿弥陀仏。

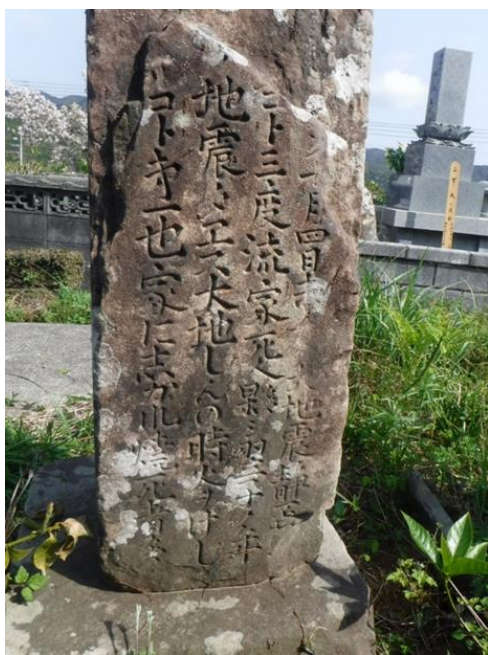
【左面】（地震発生の前日）前日より海が濁って津波が入る前兆が起こる。そのとき
に、井戸の水が濁る。あるいは、干上がる所もあった。事前に心得ておくこ
と。このとき皆が悲嘆し、難儀し、筆舌につくせない事態が発生する。後世
にこのことを伝えるために池道之助清澄が、この碑を建立した。

【右面】寛永四年（丁亥）十月四日午後一時〜三時頃、大地震が発生し、海岸部を
津波が襲うこと三度、家は流され、死者がおびただしかった。年の明けた翌
年（戊子）の間は、余震が絶えなかった。大地震の時、火を消し、家を出る
ことが第一である。家屋にしかれて焼死した人が多い。

【裏面】安政二年（乙卯）三月建立 池家の先祖墓所

『今昔大変記』の記述から：

- ・大地震が起これば、津波が必ずあるので油断してはいけない。
- ・ゆれが静まるとすぐに港の潮が引くので大変おそろしい。
- ・中浜は漁港の入口まで潮が引き、河原のようになっていた。
- ・清水漁港では、渡し船がなくても渡れるように潮が引いていた。
- ・大ゆれるときは、とび・カラス・鳥なども（感覚がまひして）飛ぶことができず、地面にころんでいた。
- ・足摺岬と伊佐村は両方ともゆれが少なく、だいじようぶだった。松尾も足摺岬や伊佐村と同じくだいじようぶだった。
- ・清水のまちは家の軒（のき）まで潮がきた。この津波のとき、牧ノ浜に住む小春という女性が、塩浜の堤を通行中、堤と一緒に流され死亡した。



↑中浜峠の池家墓所・銘文
池道之助著『今昔大変記』⇒

右上の文書は、池道之助が書いた『今昔大変記』の一部抜粋したものである。「大きな地震が発生した後は、必ず津波が発生する。」「港の潮が引いて川原のようになってしまう。その光景が大変恐ろしい。」「大地震が発生したとき、トンビやカラスなどの鳥たちも平衡感覚がなくなり、地面に落ちて羽根をバタつかせたこと。」等々、地震で発生する細々とした想定外のことが箇条書きで几帳面に記されている。

ビデオやスマホ等の便利な機器がない江戸時代末に、地震や津波のことを後世の人々に伝えるためには、「言葉による継承」しかその術がなかった。「大切な命を守り抜け！命を無駄にするな！」そう道之助が私たちに叫んでいるように思えてならない。

* * * * *

当時としては理解されることも、理解する人もいない暗闇の中で、石碑に刻み込み、文書に留めることにより、震災の怖さを後世の人々に伝えようと、道之助は孤独に戦い続けたのである。自分の言葉が、後世の人々の暗闇を照らす一条の光となることを固く信じていたに違いない。

先日、「第49回高知県図書館大会」で池道之助のことを知っているかどうかを出席者の皆さんに挙手をしてもらった。結果、ほとんどの人がその存在を知らなかった。もっともっと郷土の歴史を掘り起こして周知していかなければならないことをあらためて思い知らされた。

* * * * *

講話の途中で、「足摺海底館50周年が令和4年元旦」という本年度『広報とさしみず10月号』の記事を紹介した。母に連れて行ってもらった47年前の思い出を語った。講話を聴いていた方々は、何の脈絡もなく、その話を挿入したのでとまどったことと思う。ここでなぜ「足摺海底館に行った母との話」を挿入したかについて若干説明を加えておきたい。

子や家族を思う母の心。後世の人々の安全を祈る道之助の心。道之助の心はどちらかという父の心というべきか。どちらの言葉も人を思いやる温かい心である。心は言葉を通じて初めて人に伝わる。その愛情が深いほど魂を揺さぶる。これらの言葉は、過去⇒現在⇒未来にわたって永遠に消えることのない不滅の言葉である。

私の母は昨年鬼籍に入った。池道之助はすでに150年前に亡くなっている。身は滅びても、その発した愛情のこもった言葉は、永久に消えることがないということをここで伝えたかった。身は滅してもその精神性は、継承していく人が続く限り、不滅ということである。池道之助の思い、先見性、すごいと思った。

—今後の市史編さん室の動向—

10月25～27日(月～水)市野瀬地区真念庵試掘確認調査

11月11日(木)文化庁足摺海底館視察に同行(観光商工課とともに)

11月12日(金)土佐清水市へき地複式教育研究会東部地区高学年

「戦争遺跡のフィールドワーク及び平和学習会」午後から足摺岬小学校・幡陽小学校・下ノ加江小学校の5～6年生越地区の震洋特攻艇格納壕フィールドワークとその講話

1月(日にち未定)

土佐清水市立市民図書館歴史講座

「土佐清水市街地形成の歴史」